

氏 名	多 <sup>タ</sup> 田 <sup>ダ</sup> えり佳 <sup>カ</sup>
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 374 号
学位授与年月日	平 成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉時を編むー有線七宝とパート・ド・ヴェールの融合ー 〈作品〉「時を編む・Hadagi, Kutsu, Boushi」「時を編む・自然収集物」
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授 （美術学部） 藤 原 信 幸
（論文第 1 副査）	〃 〃 （ 〃 ） 小 松 佳代子
（作品第 1 副査）	〃 教 授 （ 〃 ） 島 田 文 雄
（副査）	〃 〃 （ 〃 ） 橋 本 明 夫

#### （論文内容の要旨）

本論文の目的は、我々の人生にとって貴重な記憶を形象化し、それを美術作品として半永久化する意義を検証することである。私の作品はガラスを用いて私の経験に関わる親しみのある事物を表現し、過去の記憶を形として再現するというものである。本論文では、その制作に及ぶまでの思考過程と、パート・ド・ヴェールと有線七宝の融合による新しい表現と技法について考察し、修了作品の制作工程とその結果について述べた。

消えうる過去の記憶を形とし、人生の永遠の記憶を獲得する行為は、人の人生にとって重要な意味を持つ。家族との思い出、旅の風景、自然の美しさから受けた驚きや感動など、過去に出会った事物のほとんどは、時が経てば人々の記憶から消えていくが、その記憶を留めることが現在の我々の存在の意義につながり、今後の生きていく力の源になるからである。それは、過去を失う寂しさや不安から逃れる心の支えとしての役目を果たし、そのことによって精神を奮い立たせもする。また記憶を形象化することは、過去の記憶への愛惜や夢への憧れからだけでない。記憶自体は明確な形として存在しないため、自由な創造によって記憶を確かな形として留めれば、豊かな表現の世界を生み出すことができる。そこに自らの内発的な感覚を表現する作品としての可能性を感じる。

私の作品は、記憶を形として留めるためにパート・ド・ヴェールと有線七宝の融合による新しい技法を用いて、現在の時を表現したものである。私にとってガラス胎七宝の銀線を形作る過程は、表現対象であるレースを「編む」という行為の代用でもあり、時の断片を繋ぎ合わせていくという意味合いも兼ね備えている。ガラスの塊は外界から区切られた空間に見えることから不思議な時、空間を感じさせる。そこに、過去の記憶を重ね合わせて見入ることができるため素材としての魅力を感じる。そういった理由から編み物の糸にあたる金属線とガラスの素材は私の制作意図を伝達する手段として最もよい媒体だと考える。そしてパート・ド・ヴェールと有線七宝において共通して用いられるガラスの粉末が技法の融合を示唆し、パート・ド・ヴェールのガラスとは思えない柔軟で優美な風合いと金属線による繊細な表現の利点を融合させる発想に至った。この2つの技法を私自身の独自の見解を経て融合し、ガラス胎七宝によって家族との温かい思い出や心がなごむ自然の姿の記憶を手作業によって構築していくことが私の制作スタイルである。

本論文の構成は以下のとおりである。

第 1 章では、制作意図とガラス素材の魅力について述べた。身近な生活や自然の中で見かける「なにげないもの」や、「消えていく時」を表現する作品の意義や私の考え、また感情の表現を可能にするガラ

素材の魅力と可能性について考察した。表現対象が日常的で単調なものであっても、存在していた場所や時間を考慮し、それ自体に特別な意味づけをすることによって「美」を発見できる。ガラスの透明、半透明の特長を生かして、ガラスの塊が成す独特な空間やレースをモチーフとした表現へと至る、私自身の根源的な制作観について論じた。

第2章では、制作にあたって用いる技法について述べた。ガラスの技法であるパート・ド・ヴェールと七宝の技法の融合による新しい表現方法を確立するうえでの実験を行った研究結果を述べると同時に、ガラスの素材を使った作品制作において、私が主に使用する技法であるパート・ド・ヴェールの歴史とその伝統的技法について示した。ヨーロッパやアメリカ、また世界の文化や歴史を背景に発展し、一度消滅しかけた窯焼成によって形成する技法の復活と歴史について論じた。各時代や地域においてパート・ド・ヴェール技法が消滅した原因と再興された目的、それぞれの作家たちにとってのパート・ド・ヴェールの存在意味や目的を踏まえたうえで私の制作や実験を進めることが、新たな作品の方向性を見出すことに繋がると考えたからである。また、修了制作で用いる七宝の釉薬と金属線による独自のガラス胎七宝の技法とその特徴について述べた。それは、従来のガラス造形の技法とは異なる七宝の利点をパート・ド・ヴェールに融合する試みである。

第3章では、修了作品のテーマと制作に至るまでの思考過程や制作工程について述べた。2011年の出産を通して制作された作品には我が子への思いがそのまま映し出されている。特にレース制作に用いるガラス胎七宝の植線工程が編み物の編むという行為と重なり、その作業を通して時の断片を構築することに制作の意義を見出した。制作を通して過去の自分自身を振り返り、また子育てと制作における試行錯誤の中から生み出された作品である。

終章では、記憶を半永久化する意図と制作過程やその結果としての完成作品について述べた。すべての表現媒体は、個人的体験としての心象の貯蔵と再現を担い、具体化され一定の状態を保っている。そして時間が留められた作品は、展示空間の中で現在の時と織り交ぜられ、観る者の様々な感覚によって彼らの心の中に位置付けられる。夢を感じ取れるような作品を半永久の記録として示す意義を検証し、作品制作で実践を行った結果と合わせて結論とした。

#### (博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、消えゆく記憶をガラスによって形象化する筆者の制作意図と、有線七宝とパート・ド・ヴェールの融合による新しい技法における実験経過、そこで生じた問題点の分析や表現上の利点などについて詳細に論じたものである。

第1章では、移ろいゆく記憶を制作者の内的感覚を通して表現する芸術作品の意味、自然物を型どりして写実的表現を試みてきたこれまでの制作経緯、ガラスという素材の特徴などから、筆者の制作観を明らかにしている。失われつつある記憶や自然の残像を留めておくための特別な空間としての「心の器」を具象化するために、包む機能を備えたレースの表現へと至った修了作品への展開も論じられている。有線七宝において銀線を立てていく作業がレースを編むという行為と重ね合わされ、さらにその作業過程が時の断片を繋ぎ合わせていく意味を持つことが論じられることで、本論文「時を編む」という主題の意図が丁寧に説明されている。

第2章は技法研究である。筆者が従来から用いてきたパート・ド・ヴェールの特徴とその歴史、新たに学んだ七宝の歴史と技法を整理した上で、両者を融合したガラス胎七宝という技法を用いた制作行程と技法の融合に伴って生じる問題点及びその解決方法など、筆者がこれまで繰り返してきた実験に基づく具体的な説明がなされている。また同じく胎に釉薬が施された陶磁器や瑠璃などと比較して、ガラスを素地に用いるガラス胎七宝が光によって様々な表情を見せ、展示空間と溶け合う独特の神秘性を持っていることなど、自らの技法に対する分析を行っている。

第3章では、修了作品「時を編む」「時を包む」の制作意図と制作行程が論じられる。レースを編むかのように銀線を立てていく作業、またパート・ド・ヴェール技法において石膏型にガラス粉末を着彩していく作業は、素材と向き合い素材を理解すると同時に、記憶の断片を構築していき思いを込める意味があることが再確認されている。ガラス胎七宝によるレース制作の試行錯誤が詳細に論じられることで、実践例の少ないこの技法についての貴重な記録ともなっている。

提出論文はこのように、筆者の制作過程と制作意図とを行き来することで、思考を形にし、制作の試行錯誤を繰り返すことで思考を深めていくという循環を示している。制作者が自らの制作の意図と技法を言葉によって書き記すことの意義を存分に示す好論文である。このような点から、審査会において本論文は課程博士論文として相応の水準に達していることが認められ、全員一致で合格とした。

#### (作品審査結果の要旨)

失われてゆく記憶を形として表現することが研究制作の目的である。「時を編む」「時を包む」は、時間の流れとともに姿を変え、消え去る現在の生き方を左右する記憶を形として留めている。現在の記憶を作品として表現する行為は、過去になる自己の姿の愛着心の発露であり、この記憶の不鮮明な部分に自己の創造の可能性を探ろうとしている。過去となる自己の想い、記憶を編む、包むという理念で制作した作品と言える。

表現力その技法によってレースを編むようにガラスに向かって細かい銀線パターンを植線していく作業工程は母が子にレースを編んでいく心とオーバーラップし、時をあたかも編んでいる作者の実感があふれた作品となっている。パート・ド・ヴェールと七宝を融合したガラス七宝は、ガラス表面上の繊細な加飾を可能にすることができ、新しい分野の挑戦といえ、研究価値の高い分野である。ガラスと七宝で用いる釉薬と金属線の相性をあわせる段階で各素材の膨張係数の違いによる冷却時のひずみや割れなど、ガラス胎七宝による大型作品の割れ防止しながらのスランピング（曲げる）方法とか金属線によるガラスの変色や割れ防止法、など作者はガラスの技法的困難な問題を提起した。『レース』はそれが持つ包む機能、容器の機能を有する空間として表現されている。『肌着 靴 帽子』は親に取って子の成長は速く、失われていくものの多さに気づき、子に対する母の感情を形として作者の思いを半永久の形として留めようとした作品である。作品に対峙して見る側の観賞者は何を思うのだろうか。十人十色の受け止め方であろう。しかしもう一歩進み、モチーフが時代を象徴する物や時代を変革していくような意味を持ったものであるとするとその作品は違った意味を持つことになる。現代を象徴的に表現する芸術作品になり得るのではないだろうか。その点を意識すると作品の重要性が増し共感が得られるのではないかと私は考える。この発表作品は、ガラスと七宝の融合が研究の主題であり、工芸的、技法的な異素材の融合を試み、新分野に果敢に挑戦し、作品として和やかな雰囲気表現し完成させていることは多いに評価できる。

#### (総合審査結果の要旨)

論文は以下の章立てによって論考されている。

第1章「永遠の記憶としての表現」と題して、時間と共に薄れゆく記憶をガラスという素材を通して形にしていくという制作の意味を検証しながら自身の制作論を組み立てている。

第2章「パート・ド・ヴェールの表現の可能性」では、筆者自身の専門領域の表現技法であるパート・ド・ヴェールについての技法研究と、新たにガラスを胎にした有線七宝という、現在あまり行われることのない特異な技法に対する研究の報告である。

第3章 修了作品 「時を編む」「時を包む」において、第1章、第2章で述べられた、作品に対する

想いと技法的取り組みに対する３年間にわたる制作の報告となっている。構想の段階、実験、制作、陳列に至る修了作品完成までのプロセスを通して、考えなおされ、書き直しを繰り返してきた試行錯誤の積み重ねを感じる内容になった。

提出論文は、第１章、第３章において書かれている自分自身の制作のモチーフ、制作論の部分は、やや個人的で表面的な文章であり、それらの持つ普遍的な意味や、素材技法に対する考察も深みに欠けている感もある。技法的な部分の記述に関しては、新しい挑戦を試みて上手くいった部分、また予定通りいかなかった部分などを経験し、当初の自身の制作意図やガラス素材とそれを操作する技法という要素を見つめ、考察を深めていった経過が書かれていて興味深い。また、たくさんの工程を持つガラス胎有線七宝の過程を丁寧に、画像を含めて記録していった部分は、この技法に関する技法書というものがない現在、貴重な資料となる。

作品審査：「時を編む」「時を包む」

特筆すべき新しい技法の発見や、展開が得られたという成果を見出すことは難しいが、一つ一つの試みと作業の積み重ねが感じられる作品の力と、作者の姿や思いが作品から感じることができる素直さが作品の魅力となっている。

「時を包む」は、以前から作品制作で用いている「パート・ド・ヴェール技法」による作品であり、薄く繊細にレリーフ表現されている刺繍の表現とその上に包まれた状態として乗る品々は、小さい作品ながら細密に再現されガラスに持つ儂さを感じさせ、なお且つ色彩の透明感、作品の表情は、どくどくの奥行きと雰囲気を持っている。これらの作品は、作者の意図する記憶のキーとして作者自身、または見る者の記憶を引き出していくという機能を果たしている。

一方で「時を編む」という比較的大きな作品は、ガラス胎有線七宝としては、大作と言ってよい。その大きさが、ガラス胎有線七宝の難しさをさらに際立たせた形になった。短い時間の中で多くの失敗を経た結果として最終的に平板な形を選択し、その上に載せた自身の現在における身の回り、生活の中から得たテーマを載せたものとなっている。

平板な形ゆえに、立体として当初計画された動性や形状の持つ意味を変更した形になったが、ガラス胎有線七宝部分は、その作業の緻密さ、工程の煩雑さや作業量に圧倒されることなく積み上げられた力強さと優雅さを感じる。その上に載せられた、三つのアイテムも自身の思いが精密に制作されたパート・ド・ヴェールによる作品であり完成度は高い。

これら６点の立体による一連のシリーズは、自身の制作哲学に対する確かな考察による裏付けと、ガラスという独特の素材を、古代に起源を持つ古い技法を再現しつつ、現在別の技法として続いている、七宝、琺瑯などの技法との融合、もしくは併用することを通し、新たなガラス素材の展開を目指すものとして、今後のさらなる研究、制作を期待させる優れた作品であると判断できる。よって、多田えり佳の論文、作品は博士号を授与するに相当する。